

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



泉（B）

この泉の水を汲んでくれ

これはさゝやかな泉だ

恰度茶わんに一ぱいほどの水だ

だが見てくれ

この水は清冽で

ま新しいのだ

無限の青空が

そのはりつめた方寸のおもてに

くつきりうつっているではないか

しんと動かないが

耳を近づけてきいてくれ

その底にしんしんと

力のみなざるつぶやきが

聞えるではないか

この泉は四方の大きい岩を

じみじみと永い日夜をかけて

絶えずしみとおって来た水が

一切の汚辱を去り、

みじんのにごりもとどめず

今朝ここに充ちたものだ

見てくれ、底の砂粒の一つ一つが

寶石のようにきらきらしている

塵一つ、枯葉の片一つ

沈んではいけない

もっと頬をその表面に近づけて

見てくれ

氷のような息吹が

泉からたちのぼる冷気が

君の感覚をさしはしないか

さあ

この泉を汲んでくれ
もろ手を出してすくってくれ

eri (えり)

絵描き

<http://www3.plala.or.jp/reinbow/>

1984年生まれ、「言葉では伝えきれない『何か』をテーマに絵を主に描いています。

絵について

この詩を読んだとき、何かを作る時にわき上がる「透明で、熱い、切なる想い」のようなものを感じました。空気だけではなく、そういうものも表せたらと思いつく描きました。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町（現・半田市）に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

純粋なものを真正面から純粋にとらえ、描き切ることとはなかなか容易なことではないが、この作品ではまるでそのものごとく見事にとらえられ表現されている。茶わんに一ぱいほどのささやかな泉だが、よく見ればその張りつめた面に無限の青空をうつし出しているという。詩人はこの清冽な泉を見てくれ、

聞いてくれ、すくってくれ、といているのだ。南吉の作品はなぜか驕りをもった作品が多いのだが、その文学の底には、この「泉」にみるような純粋なものが絶えず流れており、これが読者の心を打ち続ける大きな要素の一つであろう。南吉は書き綴った作品を、この泉のように見て欲しいと願ったのだろう。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」（一粒社出版部）「子どもたちに贈りたい詩」（教育出版センター）「新しい詩の創作指導」（共著・明治図書）ほか。